

送られつ送りつ

015 海城高等学校鉄道研究会

木曽路はすべて山の中である。

藤村の綴った夜明け前の冒頭はまさに今私の目の前に広がり、

秋の深さはいっそうこの宿場を限りなく紅色に染め上げてゆく。

ああ、ここがかの馬籠宿か。目的地だ。

旅という行為はいつも短いようで長く、長いようで短い。

早朝私を送り出したのは母であったか。道中は、多くの人と出会い、そして別れを告げた。改札、駅員、車掌、バスの運転手、飲食店の店員。もう二度と会うことのないであろう人と出会うのが旅であるし、そして別れていく。

人生は旅によく似ている。両親から育てられた私達は、成長し、そして新たな世代へと道を繋ぐ。我々人間の終着地は、この秋の葉のように、朽ち、散っていく美学なのだろうか。

馬籠宿には句碑が残されている。

送られつ送りつ果ては木曽の秋 芭蕉



中央線より木曽の山々を臨む



馬籠宿の秋

